

瑞浪市の産業振興とまちづくり

—やきものと地域, 和と洋の創造的融合に向けて—

十 名 直 喜

目 次

- 1 はじめに
- 2 瑞浪市の産業構造にみる特徴と課題
- 3 危機下のみずなみ焼と創造的経営
 - 3.1 みずなみ焼にみる生産と流通の変遷と課題
 - 3.2 榎深山の高品質経営と創造的融合
 - 3.3 山喜製陶(株)の量産経営と全方位戦略
- 4 瑞浪市の環境保全とまちづくり
 - 4.1 農林畜産業の経営と環境保全
 - 4.2 釜戸町にみる歴史文化・自然一体のまちづくり
 - 4.3 陶町の多彩な絆と創意的まちづくり
—地場産業の衰退・高齢化・過疎に地域ぐるみで挑む—
- 5 おわりに

1 はじめに

瑞浪市とのご縁は新しく、2010年春以来、すなわち第4次瑞浪市行政改革大綱づくりに(行政改革懇談会委員として)参画してからのことである¹⁾。

瑞浪市とはどんなまちなのか、かつての筆者同様、よくご存じでない方もおられるのではと思われる。読みにくい漢字名に加えて地味な土地柄、かつ小規模都市ということもあって、近隣の多治見市や土岐市と比較しても知名度は低いとみられる。そこでまずは、瑞浪市の概観、その沿革と特徴について簡単に紹介しておきた

い。

まず、瑞浪という地名からみてみると、瑞浪とは「瑞穂の浪打つ」という意味があり、「水の南(土岐川の南)」という地理上の意味も込めて、名づけられた²⁾。瑞穂とは「瑞々しい稲の穂」のことで、日本は「瑞穂の国」とも呼ばれてきた³⁾。瑞浪という地名は、まさに美しく映える日本の原風景に関わるものといえよう。

瑞浪市は、1954年に旧土岐郡と恵那郡の一部、7ヵ町村の合併により、175km²、36千人余の新生市として誕生した。岐阜県の南東部(名古屋市から40km)に位置し、名古屋都市圏の一翼を担っている。森林が市域面積の7割を占め、市域の多くが丘陵地帯にあって、市の中央部を土岐川が流れ、農地はその支流ごとに展開

1) 十名直喜「地方行政改革とまちづくり—第4次瑞浪市行政改革大綱(案)づくりを通して—」(『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第48巻 第2号, 2011年10月)に経緯と思いをまとめているので、参照願いたい。

2) 瑞浪市—wikipedia。

3) 『広辞苑』岩波書店。

するなど、豊かな自然景観を持つ典型的な中山間地の特色を呈している。

人口は約4万人で、2002年をピークに微減傾向に転じるなか、高齢化率（65歳以上）は24%を超え、国の人口予測に先んじる結果となっている。古くから陶磁器の産地として発展し、今日においても陶磁器生産高は国内屈指で、独自の「みずなみ焼」ブランドの創出に向けて、新しい技術と経営の開拓が意欲的に行われている。

しかし、陶磁器産業が急減し、新たな産業創出が急務となるなか、市は山田町の丘陵地に「瑞浪クリエイション・パーク」（中小企業基盤整備機構の分譲する新事業創出事業用地）を造成し、企業誘致を進めてきた。現在では、同パークの全区画において、企業誘致が決定している⁴⁾。

地方の行政改革にあっては、経費削減など「守り」が強調されがちである。しかし、それに偏ると、地域の衰退を呼び込むなど「萎縮」の悪循環を招く恐れも少なくない。そこで、魅力的なまちを創造するという「攻め」の活動へ、いかにシフトするかが、行政改革においても問われるのである。

瑞浪市の関係者に、そうした思いをお話する機会をいただいたのは、第1回行政懇談会の直前のことであった。2010年6月2日に開催の「瑞浪市まちづくり講演会」で筆者は、「陶磁器文化とまちづくりー（美しい自然・歴史情緒・ふれ愛豊かな）環境文化都市みずなみの創造ー」というテーマで、行政改革とまちづくりの新たなあり方について、(仮説として)提案した。

2010年6月から11年1月の間、行政改革懇

談会での5回にわたる熱い議論とそれをふまえての行政改革大綱づくりを通して、瑞浪市への愛着と関心が高まるなか、同市の産業とまちづくりのあり方について自らの目と耳で確かめ検証してみたいとの思いも強まる。

7ヶ月が経過した2011年2月15日（午前）、第4次瑞浪市行政改革大綱（案）を水野光二市長にお渡しすることができた。同日午後から翌16日にかけて、みずなみ焼の経営者、農畜産関係の市職員、釜戸町と陶町のまちづくり関係者にお伺いし、最近の状況と課題を中心に聞き取り調査を行った。

小論は、そこでの手書きメモと入手資料を手がかりにして、まとめたものである。作成に着手したのが半年後ということで、薄れがちな記憶に加えて資料の散逸もみられる。そこで、まずは筆者なりのイメージで掘り起こしを行い、粗いながらも論文の形にしてみる。それを関係者にお送りし、読んでいただいた上で、それに基づき電話やメールによる再ヒアリングを行った。それらをふまえてまとめ直したのが、小論である。

2 瑞浪市の産業構造にみる特徴と課題

瑞浪市の産業構造をみると、就業者数（表1）と付加価値額⁵⁾（表2）では違った様相もみられる。

まず、就業者数でみると、第1次産業では林業の衰退が著しく、2000年から2005年の間にも1/3に落ち込んでいる。市面積の7割を占める森林の保全・維持が重大性を増しているな

5) 市内総生産は、瑞浪市内で1年間に新たに生産された財・サービスの付加価値の合計を指す。ここでは、「付加価値額」と表現した。

4) 瑞浪市『瑞浪市の農業(2010年度版)』2010年。

表1 瑞浪市の産業構造（就業者数）

	2000年		2005年	
	人	%	人	%
15歳以上人口総数	35,853		36,083	
労働力人口	21,960		21,243	
就業者総数	21,232		20,342	
第1次産業	663	3.1	537	2.6
農業	625	2.9	525	2.6
林業	35	0.2	12	0.1
漁業・水産養殖業	3		0	
第2次産業	8,097	38.1	6,566	32.3
鉱業	44	0.2	8	
製造業	6,092	28.7	4,871	23.9
建設業	1,870	8.8	1,617	7.9
電気・ガス・熱供給・水道業	91	0.4	70	0.3
第3次産業	12,449	58.6	13,154	64.7
運輸・通信業	967	4.6	944	4.6
情報通信業			197	1.0
運輸業			747	3.7
卸売・小売業	4,845	22.8	3,936	19.3
金融・保険業	494	2.3	407	2.0
不動産業	85	0.4	77	0.4
サービス業	5,559	26.2	7,228	35.5
飲食店・宿泊業			1,010	5.0
医療福祉			1,796	8.8
教育学習支援業			1,070	5.3
複合サービス業			254	1.2
サービス業（その他）			3,098	15.2
公務（他に分類されない）	499	2.4	562	2.8
分類不能の産業	23	0.1	85	0.4
失業者	728		901	
非労働力人口	13,773		14,316	

出所：国勢調査資料（各年10月1日現在の数値）に基づく。

注：2005年の運輸・通信業，サービス業の数値は，内訳の小計

か、その担い手がさらに減少しつつあることは、深刻な問題をはらんでいるとみられる。

農業は、就業者数でみると2割程の減少傾向がみられるが、付加価値額でみると顕著な増加がみられる。さらに、農業産出額（表3）からみると、2002年（約55億円）から2008年（約75億円）にかけて20億円近く増加しているが、

その9割近くは養鶏業によるものである。養鶏業が拡張するなか、地域の生活・自然環境との整合性をいかに高めていくかが問われている。

第2次産業の落ち込みは、主として製造業の落ち込みによるもので、これは就業者数および付加価値額のいずれでも共通してみられる。第2次産業の落ち込みは、第3次産業の増加でカ

表2 瑞浪市の産業構造（総生産）

（単位：百万円，％）

経済活動別市内総生産 内訳	2002年度		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	
	実 額	構成比	実 額	実 額	実 額	実 額	構成比
1 産 業	(百万円)	(%)					
	118,998	92.6	113,214	106,438	105,968	107,773	91.0
1.1 農 林 水 産 業	1,513	1.2	2,485	2,681	2,572	2,328	2.0
a 農 業	1,322	1.0	2,369	2,530	2,482	2,230	1.9
b 林 業	156	0.1	73	112	56	61	0.1
c 水 産 業	35	0.0	43	40	35	37	0.0
1.2 鉱 業	59	0.0	5	4	9	7	0.0
1.3 製 造 業	24,118	18.8	24,295	19,335	17,434	17,846	15.1
1.4 建 設 業	10,378	8.1	8,264	7,098	8,499	9,987	8.4
1.5 電 気・ガ ス・水 道 業	3,137	2.4	2,837	2,534	2,112	2,007	1.7
1.6 卸 売・小 売 業	13,549	10.6	11,625	11,635	12,407	12,721	10.7
1.7 金 融・保 険 業	5,360	4.2	5,097	5,325	5,141	4,991	4.2
1.8 不 動 産 業	15,494	12.1	15,480	15,382	15,550	15,872	13.4
1.9 運 輸・通 信 業	14,260	11.1	11,242	9,958	8,834	8,598	7.3
1.10 サ ー ビ ス 業	31,130	26.3	31,883	32,485	33,410	33,416	28.2
2 政 府 サ ー ビ ス 生 産 者	10,962	8.5	11,182	11,291	11,025	11,225	9.5
2.1 電 気・ガ ス・水 道 業	2,107	1.6	2,031	2,112	2,129	2,155	1.8
2.2 サ ー ビ ス 業	3,349	2.6	3,619	3,672	3,535	3,511	3.0
2.3 公 務	5,506	4.3	5,532	5,507	5,361	5,558	4.7
3 民 間 非 営 利 サ ー ビ ス 生 産 者 (対家計)	3,270	2.5	3,205	3,255	3,441	3,432	2.9
4 婦 属 利 子 等	△4,763	△3.7	△4,251	△4,218	△3,888	△3,958	△3.3
5 市 内 総 生 産 (=1+2+3+4) 〈内 訳 小 計〉	128,467	100.0	123,350	116,765	116,547	118,473	100.0
第1次産業 (=1.1)	1,513	1.2	2,485	2,681	2,572	2,328	2.0
第2次産業 (=1.2+1.3+1.4)	37,692	29.3	35,401	28,971	28,054	29,840	25.2
第3次産業 (=その他)	89,262	69.5	85,464	85,113	85,921	86,305	72.8

出所：瑞浪市『瑞浪市統計書』各年版に基づく

(http://www.city.mizunami.gifu.jp/odocs/administration/plan/pdf/201102_outline4.pdf)。

注：第2次産業については、1.2鉱業、1.3製造業、1.4建設業に加えて、1.5電気・ガス・水道業を含めている。

第3次産業については、第1次産業(=1.1農林水産業)、第2次産業以外の全ての経済活動とみなしている。

バーされている。

第3次産業のなかで伸びが際立つのは、サービス業である。とくに、就業者数では2000年から2005年の間に3割アップがみられる。他方、付加価値額では微増にとどまっており、新

規参入等に伴う競争の激しさや低所得化が反映しているとみられる。

窯業・土石業(表4)に目を転じると、出荷額では食卓用陶磁器製造業の落ち込みが顕著で、2004年から2008年の間に69億円から46

瑞浪市の産業振興とまちづくり

表3 瑞浪市の農業産出額

単位：百万円

		2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2008年
総額		5,537	4,739	5,621	6,836	7,229	7,461
耕種	計	802	818	772	712	739	739
	米	541	553	499	467	449	449
	野菜	133	141	154	130	144	144
	その他	128	124	119	115	146	146
畜産	計	4,727	3,916	4,844	6,119	6,488	6,720
	肉用牛	205	228	202	265	278	298
	乳用牛	331	333	363	352		
	豚						
	鶏	4,157	3,313	4,227	5,443	5,820	5,820
	その他					42	42
加工農産		8	5	5	5	2	2

注：2006年までは岐阜農林水産統計年報，2008年は瑞浪市農林課資料に基づく。

表4 瑞浪市の窯業・土石業

	2004年			2008年		
	事業所数	従業者数	出荷額	事業所数	従業者数	出荷額
		人	千万円		人	千万円
合計	96	1,561	1,747	159	1,376	1,598
食卓用陶磁器	27	769	686	38	530	448
陶磁器製タイル	5	78	60	6	44	51
陶磁器絵付	18	132	33	30	111	46
陶磁器用はい土	9	77	129	12	76	112
耐火煉瓦・耐火物	9	179	280	11	196	373
セメント・コンクリート製品	5	×	×	3	20	52
鉱物・土石粉砕	5	86	126	26	124	157
石膏製品	1	×	×	8	28	17
その他	17	207	343	25	247	342

出所：瑞浪市『瑞浪市統計書（2010年度版）』。

注：数値は、市単独集計による概算値である。「食卓用陶磁器」は完成品の製造業のみ、半製品の製造業は「その他」に含まれる。

億円へと3割ダウンとなっている。就業者数でも、760人から530人へと同様の傾向がみられる。地場産業として歴史的かつ文化的にも、地域の産業と生活を支えてきた陶磁器産業の衰退は、地域社会に大きな影を投げかけている。みずなみ焼という地域ブランドを軸に、創造的な経営とまちづくりの展開、さらには両者の融合的な発展が求められている。

また、新たな基軸産業の育成と誘導という政策的課題も切実性を増している。クリエイション・パークへの企業進出の増加は、その呼び水になりうるとみられるが、企業と行政、地元との創意的な交流と施策が問われている。

3 危機下のみずなみ焼と創造的経営

3.1 みずなみ焼にみる生産と流通の変遷と課題

最先端技術・トンネル窯の海外移転と生産の空洞化

トンネル窯は、ディナーウェアの生産に向いていて、大量に安い価格で米国に輸出した。陶町にはかつて御三家と呼ばれる大手陶磁器メーカー、すなわち「曾根磁器園（以下、曾根）」、「山五陶業（以下、山五）」、「金中製陶所」（以下、金中）、があったが、今は無い。

陶磁器の多品種少量生産においては、世界一流と海外で評価されるも、国内ではそれほど知られてはいない。日本が多品種少量生産へとシフトするなか、トンネル窯は解体され、中国へ渡った。やがて、中国からマレーシア、タイへとシフトする。築炉メーカーが設備技術を海外へ輸出するのに伴い、ものづくりの最先端技術も海外に流出していったとみられる。

工業・商業組合員の激減と兼業化

高度成長期の頃は、陶磁器工業協同組合に所

属するメーカーが60軒あったのが、今では11軒に減ってしまっている。陶磁器卸商業協同組合でも、100軒以上あったのが、今では23（実質10）軒に減っている。かつては、上絵付加工もやっていた、高校の卒業記念品に上絵付け加工を施すなど、出来たものに絵をつけるといった仕事もあったが、いまでは商業のみになっている。上絵付業をみると、洋食器の加工の仕事なども激減し、アルバイトや農作業などをしながら、週に2-3日、陶磁器関係の仕事をするといった兼業加工業が多くなっている。

上絵付業は、年をとっても働けるというのが魅力であるが、人件費高、燃料高、中国品の流入などで維持するのが難しくなっている。70歳過ぎても仕事は何か出来るが、この1年で3軒が廃業するなど、上絵付加工業の淘汰が急激に進んでいるのである。世界に冠たる製品をつくっても、売れ行きに結びつかない。

技術の継承と開発の課題

「山茂」は、「金^{きんくさし}腐」という技術をもち業務用食器の最高級品をつくっていたが、今は無い。1軒が、その技術を受け継ぐも、経営のかじ取りが難しくなっている。「金線」の技術も、熟練技が必要でヘリ（縁）では差がつく。

東濃地域は、全国の6割を占める食器を生産しており、県と3市の4研究機関（岐阜県セラミックス研究所、瑞浪市窯業技術研究所、多治見市陶磁器意匠研究所、土岐市立陶磁器試験場）が共同して研究開発を進めており、企業の生産力や技術開発力を裏で支えている。

陶磁器製の給食用食器は、児童・生徒の情操教育には良いが、重いので給食センター等で働いている人が腰を痛めやすい。強化磁器は丈夫であるが重いことから、軽量強化磁器が開発された。給食用食器は、つくるのが難しく歩留は「よくて7割」といわれるなか、「山和陶業」で

は80数%の歩留を出している。ただ、食洗器メーカーとの問題やポリプロピンの登場などにより、難しい状況もみられる。

販路開拓とインターネット販売

直販に対して、数年前は組合などからの抗議もあったが、最近では仕方ないと受けとめられるなど対抗意識も薄れている。従来のルートを守っても、量は出ないし、利益率低下も避けられないからである。

陶磁器の販路拡大では、3期にわたって瑞浪市長をされた高嶋芳男氏をはじめ瑞浪市役所の支援が大きく、業界を助けてきたという。陶磁器をはじめ飛騨牛、タオル、飛騨家具などを対象に、中国の富裕層をターゲットにした上海戦略への補助金を7-8件出したり、バイヤーを連れてくる等。

「歴史的な名品を復活させよう」という取り組みにも力を入れている。産地問屋がホームページで、1970年代に大ヒットした製品などを千点並べてオークションにかけるなどをしている。ネット通販は、生きる道の1つでもあり、3軒が成功している。インターネットのみで商売している組合員もいて、楽天に出店して月に100-400万円売り上げている者もいる。2等品のみを扱う「ペケ屋さん」もいて、メーカーが倒産すると2等品を引き取り、きれいにして売る。

新しいモデルの追求

メーカーや流通業者の高齢化が進むなか、「軟着陸したい」と考えている者が少なくない。今ならギリギリ儲かっているし、後継者もいないからである。陶町の商人は、地元で出来たものを売ってきたが、陶町の洋陶もなかなか売れなくなっている。地元生産の食器は、2割ぐらいを占めている。地元のミニコミ紙で「座して死を待つ陶磁器業者」という記事が載った。しか

し、末端業者のチェーン店と手を組んで卸売、小売り、あるいはギフトなどで、新しいモデルを追求している。

陶町には、陶磁器関係者を含め4千人が生活している。登り窯の名物もできて、1億円以上の宣伝効果があるとみられるが、商売には結びついていない。祭りなどイベントにはお客も集まるし、窯元めぐりなどもあり、これらをどう生かしていくかが今後の課題である。

瑞浪市では、児童・生徒の食器デザインコンテストを行い、その作品を陶磁器の皿に絵付して展示している。市の主催で、2商業組合と2工業組合、1輸出完成組合、窯業技術研究所の協賛で実施、毎年入賞者の作品130点が、新しいデザインの絵皿として誕生している。

みずなみ焼のブランドづくりとカタログ文化

地域としては、「みずなみ焼」の商標登録⁶⁾を行い、ロゴマークなどを統一して、美濃焼の中でも独自のブランドとして内外への展開を図っている。朝日新聞でも「キーワード」として「みずなみ焼」が取り上げられ、用語解説されている⁷⁾。みずなみ焼のアクセントは、洋と

6) 第5097114号。商標は「みずなみ焼」、権利者は2つ(瑞浪、恵那)の陶磁器工業協同組合、指定商品は「瑞浪産の陶磁製食器類」、商品・サービスの特徴は「美濃焼の中でも特に瑞浪市内で生産される陶磁器食器でデザイン・品質へのこだわりに加え、食品衛生法に適應する安全・安心データの添付等、自主的な厳しい審査基準をクリアする製品」としている(www.jpo.go.jp/torikumi/t_torikumi/tourokushoukai/bunrui/pdf/21-015-5097114.pdf)。

7) 「美濃焼の産地、瑞浪市の瑞浪工業協同組合と恵那工業協同組合の地域ブランド。磁器を中心に、洋食器などを生産している」(朝日新聞、2010.12.2)。

和の融合にある。「みずなみ焼は、『洋』と『和』の文化が、微妙なバランスで『融合』したスタイルとして表現され、これからの陶磁器デザインをつくりあげていきます」と謳っている⁸⁾。

いかに素晴らしいカタログをつくり、いかに宣伝するかが問われている。カタログ『みずなみ焼⁹⁾』では、主題を「表情豊かな磁器を楽しむ」としており、「料理の発想が湧いてくる。『使ってみたい』というフレーズに「みずなみ焼の原点」をみる。「和 Japanese Style」と「洋 Modern Style」を軸に、前者には「雅」（特別な瞬間を演出する優雅な器）、「麗」（もてなしの心意気を現す端正な器づかい）、「朴」（暖かみを伝える素朴さを表現した器たち）を、後者には「Stylish」（フォルムに漂うスタイリッシュさを自由に楽しむ器たち）、「Modern」（シンプルでありながらレリーフに個性を持たせたモダンなスタイル）、「Sharp」（仕切られた空気感を器にしたシャープなデザイン）を、配している。

2001年には11社が集まり、「瑞浪コーポレーション」を立ち上げて、ドイツのフランクフルトで開催される国際消費財専門見本市「アビエント」への出展など海外へのアプローチを現在まで続けている。昨年からは、ジェットロを介して中国に出るとか、アジア圏をターゲットに海外バイヤーズの招聘も進めている。瑞浪では和陶と洋陶の両者を生産しており、フランクフル

トを起点にヨーロッパ・アメリカ方面へ、また上海・香港等を介して東南アジアへの販路開拓にも力を入れている。

3.2 ㈱深山の高品質経営と創造的融合

2011年2月15日、午前中に瑞浪市の水野市長に第4次行政改革大綱（案）を提出した後、午後から翌16日にかけて瑞浪市の産業とまちづくりの見学・聞き取り調査に出かけた。最初に訪問したのが、㈱深山¹⁰⁾である。

㈱深山の創業と命名

深山の経営については、代表取締役会長の松崎捷也氏からお伺いした。2階の窓から見えるのが屏風山¹⁰⁾である。稲津から良く見えるので、社名を深山と名づけた。同社が、^{みやま}鋳込み専業メーカーとして創業されたのは、1977年末のことである。

洋食器の生産・輸出の最大産地

この地域は、かつて恵那郡と土岐郡があった。土岐郡は3分割され、その一部と恵那郡の陶町が瑞浪市に、一部は土岐市に、また一部は可児郡とともに多治見市になっている。美濃地域には陶磁器の工業組合が、13（瑞浪2、土岐7、多治見4）ある。

恵那地域（現在の陶町を含む一帯）の陶磁器工業組合は当時、ディナーセットなどの洋食器の生産と米国輸出では、最大の陶磁器産地で、機械生産したものを大量に輸出した。変形皿や

8) <http://www.mizunami.biz/j/event/index.html>.

9) 瑞浪陶磁器工業協同組合『みずなみ焼』。ここでは、多様なコンセプトを軸に、市原製陶(株)、(株)大恵、山喜製陶(株)、ナルセ陶苑、カネ弘製陶、小田陶器(株)、カネズセラミックス(株)、(株)深山の8社の製品が、系統的に紹介されている。

10) 稲津町を、ちょうど屏風を立てたようにそびえる屏風山は、岐阜県下で百名山の一つに数えられている。山頂からは、絶景のパノラマが眺められ、東濃最大の湿地といわれる「黒の田東湿地」にて野鳥のさえずりや四季折々の貴重な植物群が観察できる（「緑豊かな屏風山と温もりのまち稲津町」稲津コミュニティセンター）。

ポット、砂糖入れなどをつくるも、それらをセットアップする工程を担ったのは、瀬戸の加工完成業者である。セットアップされた商品は、瀬戸から輸出向けに出荷されたので、輸出実績の数値は愛知県となり、岐阜県には輸出実績が記録として残らない仕組みになっていた。



図1 (株)深山 代表取締役会長・松崎捷也氏に聞く

注:2月15日、(株)深山にて撮影。左側が松崎捷也氏。

創業当時の経営と業界状況

創業まもない頃1978年に、大手商社から下請けの鑄込み專業メーカーにならないかという誘いがあった。需要が下降線となるなか、魅力的な誘いであったが、躊躇した。当時、ソ連向けの輸出の話が急ぎよ出てきて、鑄込み品の注文が大量に舞い込んできた。それが立ち消えとなり、困ったことになるも、国内向けの商社にお世話になって、何とかしのぐことができた。品質・納期に厳しい商社で、国内向けはきめ細かな対応が必要だった。

当時は、地場産業としての重責もあり自負もあった。メーカーと商社は厳然と区別され、美濃の大手商社が活況を呈していた。結婚式の引き出物として、食器などの陶磁器は定番の一つであった。それが、カタログを渡すというスタイルに変化すると、陶磁器の選択は10分の1に激減した。昔は、3-5月は結婚式シーズン、

夏以降はフェアが組まれ、注文見込みもとりにすかった。産地問屋は注文も出せたし、メーカーへのフォローもできた。

設備過剰と需要激減

1970年代には、燃費効率がよく量産設備であるトンネル窯の導入が相次いだ。築炉メーカーとして定評のある高砂工業は、日本一のトンネル窯メーカーで、その生産と販売を進めた。陶磁器の需要減のなか、メーカーは大量につくってしまうため、不良在庫が膨らんでいく。

需要の激減は産地問屋の衰退を招き、またそれがメーカーを直撃して大手メーカーの倒産が相次ぎ、物心両面で苦しい時代に突入した。業界も全てが変わった。市場の落ち込みに加えて、中国から輸入品が流入する。

提案型メーカーとして生きる

深山は、資金や暖簾など何もなく、それゆえ小さくスタートしたが、それは通常とは異なる対照的な行動であった。

深山の手がける鑄込みは、大量生産ができないので、鑄込み品は余分な在庫をもたないようにしている。2000年頃には、2つの道があった。第1は、産地の商社の下請けになってOEM¹¹⁾品をつくるという道である。しかし、大ロット注文が小口化するなか難しくなる。第2は、提案型メーカーとして生きる道である。時代の感性をふまえたデザインなどを企画・提案し、ユーザーに売り込んでいくのである。

同社は、第2の道を選んだ。会社を3分割している。その1つは生地メーカーの(株)CCMで、25人が働く。鑄込みは、最初の造りがポイントとなる。当初は外注していたが、荷口の安定

11) 他社ブランドの製品を生産することで、Original Equipment Manufacturingの略称。

化が難しいことから、内製化している。その2つが(株)深山で、25-6人が働く。CCMでつくった生地に焼成と加飾を施す。その3つはミヤマプランニング販売会社で、5-6人が働く。デザイナーは3名いて、専属デザイン会社にも外注する。

高品質・高歩留の「美しい」ものを追求

週に1回は、デザイナーズ会議を開き、営業も出席する。売上高は月に3千万円で、年に6億円強から4億円を切るまでダウンしている。デザインが勝負をいわれるが、デザインだけではダメで、歩留りの良い製品をつくる必要がある。歩留りは通常8割とされるが、同社は95%で、社内での不良は5%に抑えている。

工程間の歩留りが重要で、工程ロスを抑え、満足した品質のものをつくるという工程管理がポイントとなる。受注生産では納期がタイトであるが、つくり掛けから窯出しするまで1週間かかる。聖林館というピザ屋のオーナーシェフがテレビに出ていたが、ピザの皿は当社製である。

美しいものをつくる、私たちにしかできないものを提供しようというのが、モットーである。「美しい」とは何か。1つは形であり。2つは白生地で、どこまでも白く清潔感あるものである。原料と釉薬を厳選し、焼き切るという焼成技術によって生み出される。

鑄込みでしかできない形状、しかも薄く深く、を追求する。焼成での15%縮小を見込んで、ひずまないように丁寧につくる。加飾はミヤマプランニングでのデザインに基づく。加飾に銅版を使っているが、銅版技術には創業以来の思いがある。稲津は、里泉焼という銅版印刷技法の発祥の地といわれ、今から150-60年前に一世を風靡したが、その窯元が創業した土地の上に現在の当社の工場があるという。

数多くの受賞に輝く

同社の商品は、これまで数多く受賞している。2010年度には、「sasasa(サササ)」と「isola(イゾラ)パレットプレート」の2商品が財団法人日本産業デザイン振興会のグッドデザイン賞を受賞した。



図2 2010年度グッドデザイン賞の盾と商品(sasasa)

注：(株)深山にて撮影。

同社は、過去2回、同賞に輝いているが、ダブル受賞は初めてのことである。「sasasa」は、表面に銅版で笹の模様をつけた4アイテムの白磁のカップで、日本的な模様でありながら洋酒のグラスとして使える繊細な形状が評価された。「isolaパレットプレート」は、小皿を3つに仕切ることによって多様な使い道を生み出した器で、食・住のどちらにも対応できる丁寧な仕上げが評価につながった¹²⁾。

また、秋の美濃焼新作展示会では、1999年以来、中小企業庁長官賞(1999, 2003, 4, 7, 8, 9年)、経済産業省製造産業局長賞(2001, 5, 6年)、中部経済産業局長賞(2000年)、岐阜県知事賞(2002年)をはじめ、毎年、複数の賞を受けてきた。

12) 岐阜新聞, 2010.10.14付, および中部経済新聞, 2010.10.7付。

器の選びとコンセプト

食器もこの10年で大きく変わった。ここでしかないものを求めてくる者が多くなった。「ここには欲しいもの、しゃれたものがたくさんある」という。レモン絞りやドレッシングなど、積み重ねができるようにしている。器の選びには、文化レベルというか開発コンセプトへの関心が高くなっている。他方、日本の一般家庭の多くは、15-20年前の食器揃えのままに留まっている。

つくるものは、生活雑貨、ギフト、業務用からなる。業務用は寸法・機能を満足させた上でシェイプが優先されるが、生活雑貨はデザイナーの感性が求められ、Isola（イゾラ）では島をイメージし、Kowake（小分け）では小皿への小分けが提案される。Minamo（水面）もある。同社のギフトカタログには、それらがコンセプトともに多様な形で提案されている。「Isola—イゾラパレットプレート2サイズ」は、「食卓や暮らしのさまざまなシーンに合わせ、たくさんの使い勝手の生まれる2つのお皿」として、多様な用途にあわせて提示される。Minamoは「湖面にはしる心地よい風により生まれるさざ波、それをとりこんだ美しいエッジのフリーカップ」、「sasasa」は「その薄さゆえに、ほんのりと透け、浮かび上がるように見える筐は、障子越しの風景を思い起こし…懐かしい土の触感」のグラス、などとして提案されている¹³⁾。

より多様な商品が、多彩なコンセプトとともに提案される同社のカタログ¹⁴⁾も、見応

えがある。使いたいイメージと楽しみづくりというコンセプト¹⁵⁾が最初に示され、「New Products」「Modern tableware」「Japanese modern」「Café style」という4つのコンテンツが提示されている。コンセプトの語りかものがづくりと融合する、まさに「もの語りづくり」の色彩がみられる。磁器商品の文化革命を演出しているのかもしれない。

同社のカタログは、みずなみ焼のカタログとも波長が合い、共鳴効果が感じられる。

みずなみ焼の振興とグローバル化に向けて

2010年3月、東京に事務所を設けた。同社は、岐阜県を代表するメーカーとして、市内にある2つ（瑞浪、恵那）の工業組合と2つの商業組合を束ねて、ドイツの「アンビエンテ」出展をリードした代表的企業でもある。

3.3 山喜製陶株の量産経営と全方位戦略

2011年2月16日、山喜製陶株^{やまき}にお伺いし、河口一社長（58歳）より同社の経営についてお聞きする機会を得た。有田には5年ほどいて、有田の状況や3右衛門の実情についてはよく知っているとのことである。

量産経営と「全方位戦略」

トンネル窯で、洋食器や和食器など1日に2万個焼いている。いろんな食器を、低価格で高付加価値というリーズナブルな商品として、売っている。製品の出荷先は、百円ショップ3

13) 『Miyama 2010 Gift collection—うつくしいうつわ—』miyama planning co., Ltd. 2010年。

14) 『Miyama original tableware—うつくしいうつわ Japanese Modern—』miyama planning co., Ltd. 2010年。

15) カタログの見開き冒頭に、次のようなコンセプトが示されている。「私たちが大切にしていること。それは、お客様が器を見て、使いたいシーンがイメージできること、そして丁寧なものづくり、プラスちょっとした遊びや驚きがあること。…日々の暮らしの中で、器を使うときの楽しみが増えることを望みながらものづくりに取り組んでいます」。

割, ホームセンター 2割, 業務用 2割, その他(ギフト, 粗品, 販促品) 3割で輸出も少しあり, あらゆるルートへの展開を図る「全方位戦略」で対処している。それは, どこかに特化するとリスクが高まるからで, 既存のルートは残しつつ新ルートの開拓を進めているという。

同社は, 様々なユーザーのニーズに真摯に対応してきた結果, 多様な和陶器の揃うオールラウンドプレーヤーへと成長してきた。日用陶器, 業務用食器, ギフト商品といった目的別の分類はもちろん, 皿, 茶碗, 鉢, 丼, 湯飲みなど種類別にみても何かに偏ることなく, 多種多様な商品生産を行っている。「山喜に行けばなんでも揃う!」。今や, それが自慢の1つになっている。「京唐草」や桜シリーズといったロングセラーの定番商品も生まれ, 「桜といえば山喜」といった声もいただいているとのことである¹⁶⁾。



図3 山喜製陶(株)代表取締役社長・河口一氏に聞く

出所: 2011年2月15日, 山喜製陶(株)にて撮影。中央が河口一氏。

右は瑞浪市商工課長・遠藤三知郎氏。

百円ショップ向け商品の展開と文化

百円ショップ向けの商品をつくっており, 全国の著名な百円ショップと取引している。これ

までのお客様は千店あるが, 新たな百円ショップとも取引を始め, 2010年12月頃から供給が間に合わない状況が続いていた。

消費者に一番近いところでものづくりをしようということである。百円ショップで観察していると, 30分かけて1個のお茶碗を選んでいる。お茶碗は理屈ではなく, 感性がポイントで, 感性に訴えかけてくるものが求められる。胸の形をした「ふっくらしたもの」, あるいは「ほっそりした」朝顔茶碗など。

(東京, 大阪, 名古屋などに店舗を広げる) ダイソーでは, ベンツに乗って百円ショップに乗り込んでくる者もいるとのこと。「安かろう, 面白かろう」の一点超豪華主義とみられる。新しい食器は, どこへ行っているのか。

癒しとなごみの演出

国民に家族的な温かい癒しを提供することを, 経営の基本としている。なごみを醸し出す食のバイプレーヤーでありたい。「うちの商品を使っている居酒屋さんは, こうあってほしい」という思いを伝えている。東京の東銀座で行われた居酒屋甲子園では第2位になった居酒屋がある。そこを訪ねると, 「河口様, ご来店有難うございます」のメッセージが出されていた。おしぼりサービスは, 熱・冷・普の3種類が揃えてある。うちの食器が焼酎コップとして出てくる, また丸い氷を入れて出てくる。うちの食器, 地元の食材, 笑顔で心からのおもてなしの3点がセットになっている。

1,300°Cで焼いて適当な厚みにし, 白い透光性がポイントになる。といっても, 真っ白な茶碗は敬遠される。粘土の可塑性, ローラーマシンの具合, そして適度な白さが求められる。

職場の雰囲気と従業員の構成

46mのトンネル窯は, 正月とゴールデンウィーク, お盆の時のみ, 停止している。1台

16) 「山喜製陶のこだわり」(<http://www.yamakiseito.co.jp/mind/>).

の台車に100-800個積み、35分かけて窯に挿入し、15-6時間かけて焼成する。

従業員は40人で、正社員14(内、女性5)人、パート26(内、女性13)人。18歳から70歳までいて、60歳以上が1/3を占める。高齢層との間では「辞めてくれないか」、「あと少し」といった押し問答もみられ、職場の雰囲気は「家族的で厳しくない」とのことである。パートの導入は10年くらい前のことで、経営が厳しさを増して正社員だけでは対応が難しくなったためである。土・火曜を休みにしており、年間の出勤日は約265日で、1年に500万個(=2万個×265日)をつくっている。パートは、時間給でワークシェアリングをしており、保険料は正社員の3/4を充てている。

デザイン、生産、営業がこなせる多能工いわばトリプルプレーヤーを育てたい。昼食会も月1開催しており、2つのチームに分けて、20人ずつで行っている。「ランチミーティング」と呼ばれるもので、日々の業務で考えたこと感じたことなどをお互いに出し合う場となっている。部署を超えた交流と情報交換を通して、社内の一休感の醸成につながっているという。

社内を見学していると、「ありがとう!」と声を掛け合う場面も幾度かみられた。お互いに確認し理解しながらチェックしていく一種のあいさつ運動とみられるが、同社独特のスタイルでチームワークを高めるのに役立っているとのことである。

商品と市場の開発

同社は、1949年の創業で、1980年代初めは日に3.5万個生産し、社員も80人近くいた。それが、今では売上高、社員のいずれも半分に減っているし、売り先には元気な会社が少ない。どういう層をどのように満足させるかを考え、ターゲットを絞り、いかに攻略するかが問われ

ている。高価格品を2-3割までに増やすことを考えている。

桜を中心にデザイン開発を進めているが、ヒット商品を生み出すのはなかなか難しい。一般商社には、クローバー、十草、唐草模様など伝統の柄を現代にリメイクして提案していく。どういう精神状況にあり、何が求められるかというコンセプトを重視している。

東京ドームで「やきものワールド」が開かれており、入場料1,700円(当日2,000円)で、そこに3年前から業務用の商品をカタログと一緒に出している。「お客さんに声をかけ売れて嬉しかった。翌日は思い切りがよくなり、お客さんにもよく売れた」といった声もある。3回リピーターもいたが、「好きだ」という人たちが変化してきており、ターゲットを絞ることも必要である。

食の欧米化が進み、ご飯を食べない人が増えている。高校では、朝ごはんコンテストを行っているが、20-30年前の器を使っている。旬の食べ物を旬の食器で食べようという提案をしている。廃棄する食器には、「茶碗供養祭」等を行っている。

グローバルな展開に向けて

国内が飽和状態にあるなか、10月11日は上海、11月4日は香港で、ハウスウェア・ショーが開催される。メーカーが直接出ていくのは珍しいが、こうした企画を追い風にしたい。それまでは、ホテル・チェーン店でのショーは上海では難しかった。香港でも、貿易商社に売って、そこからお金を回収するというやり方であった。香港貿易発展局、日本ジェトロ、瑞浪市陶磁器工業協同組合、岐阜県産業振興センターの支援を受けての、セールス・プロモーションの舞台として捉えている。

スイス(瑞西)は文字通り瑞浪の西方にある

が、瑞浪を「東洋のスイス」として売り出そうという話も出ている。瑞浪市には、化石やゴルフ、おいしいものがあり、世界中から人を呼び込んでいきたいという。

4 瑞浪市の環境保全とまちづくり

4.1 農林畜産業の経営と環境保全

2011年2月16日、瑞浪市役所にて経済環境部の小栗英雄・農林課長および棚橋武己・家畜診療所長から、瑞浪市の農林畜産業について聞き取りを行った。当日は畜産業の現場見学も予定されていたが、口蹄疫、鳥インフルエンザ対策のため立ち入りができず、実施できなかった。

耕作放棄地での「まこも」栽培

瑞浪市には、専業農家がほとんどないなか、耕作放棄地が年々増加する傾向にあり、2008年の調査で48ha（内、農振農用地内に27ha）に上ることがわかった。耕作放棄地は、集落の景観を損なうだけでなく、産業廃棄物の不法投棄や鳥獣・害虫の生息場所となって近隣の農作物被害をもたらすなど、集落環境を著しく荒廃させる要因となっている。

そこで、こうした放棄地を再生する取り組みが進められている。2006年度より、特産品開発も兼ねて「まこも」の栽培が始められている。まこもは、イネ科の多年草で、河川敷などに在来種が生息している。根元は食用になるなど、ワイルドライスとも呼ばれ、枝葉は神社のしめ縄にも使われる。

水田の4割が転作している状況の中、何かをつくらねばならないということで、「まこもたけ」をつくっている。「まこもたけ」は、黒穂菌の作用により茎の部分が肥大化したもので、食物繊維やカリウムを多く含み、便秘解消や血

圧を下げる効果があるといわれ、注目されている。シャキシャキした触感が特徴で、生で食べる、煮る、炒める、揚げるなど調理法は多彩にあり、中華料理店や料亭で高級食材として利用されている。2008年には瑞浪まこも生産出荷組合が設立され、安定した品質を確保できるようになったが、収穫や調製の面で多くの課題が残されている¹⁷⁾。

水田での飼料栽培と放牧事業

国は2007年に、飼料自給率の向上および増加する耕作放棄地対策として、水田に飼料作物をつくり、牛を放牧するという事業を策定した。幾つかのパタンが試行されているが、瑞浪市では放牧研究会を立ち上げ、耕作放棄地帯に飼料用稲を栽培して家畜を放牧するという、新たなスタイルの畜産を実験中である。この事業は、岐阜県では瑞浪市をはじめ3か所、市内では日吉町北野区で主として行われており市内6haに延べ30頭が放牧されている。2009年には、モミマロンという飼料用稲を植えて水田への立毛放牧を実施し、良好な結果を得たとのことで、栽培技術の普及と低コスト化、放牧面積の拡大に努めている。



図4 瑞浪市農林畜産行政の専門家に聞く
注：2011年2月16日、瑞浪市役所にて撮影。
前列左から農林課長・小栗英雄氏、右に家畜診療所長・棚橋武己氏。

17) 瑞浪市『瑞浪市の農業（平成22年度版）』2010年。

直売場の新設と活用に向けて

まこもたけは、売り先がネックで市場出荷になかなか乗れないということもあって、直売場での販売を考えている。新設が予定されている直売場では、畜産物はフルシーズン提供できる。飛騨牛は市内に約900頭飼育されている。大湫町の養豚場では岐阜県とともに霜降り割合の高い豚肉のブランド化を進めている。野菜農家は、スーパーに4割、農協経由しての出荷が6割となっている。直売場では、ブランド化した精肉や瑞浪産の飛騨牛なども販売する。新鮮な品を加工して販売することも目玉の1つとして考えている。

山林をめぐる保全・管理問題と新たな取り組み

瑞浪市は、山林が7割を占め、そのうち4割が造林地で、50年経てば、ヒノキも出荷できるはずである。ところが、間伐などの手入れがなされていないため、下草も育たず、土砂流出による山崩れなどが今にも起きそうな山が多くなっている。

戦前は陶磁器産業に薪を大量に使用することから禿げ山になったが、戦後は植林に力を入れ、北へと木曽川沿いにも植林を進めてきた。経済林として育成されるも、不在地主が倍増するなか、経済的に成り立たなくなるにつれ放置化が進んだ。

岐阜県の民有林は668千haで、(コナラ、ブナ、クリなど広葉樹が主体の)天然林359haと(スギ、ヒノキなど針葉樹が主体の)人工林309千haから成る。「災害に強い森林づくり」を基本に、「環境保全を重視する森林」(天然林対象)と「木材生産を重視する森林」(人工林対象)に区分し、それぞれの目的に応じた森林づくりが進められている¹⁸⁾。

瑞浪市の民有林は11.9千haで、私有林10.3千ha、公有林1.6千haから成る¹⁹⁾。山の管理は、岐阜県がやっている。山の手入れをするには、作業道が必要である。作業道を整備するには、地主の了解をとる必要がある。ところが、相続によって所有者が複雑化し、境界も見定めが難しくなっている。市道や県道に近いところは、分譲地となるなど乱開発が進んでいる。山の所有者は、名古屋市在住が増えて「瑞浪市名古屋区」の様相がみられる。

瑞浪市では、境界を定めて、集団として間伐をしようという呼びかけを行い、2010年からスタートしている。年60ha(ヘクタール)のピッチで600haの山林の間伐を進めようというものである。国、県、市の補助金をつけて、負担金を少なくし、収益は土地所有者に入るようにしている。

養鶏の経営と環境保全

瑞浪市では12農場で養鶏が行われており、200万羽以上が飼育されている。その産出額は約60億円に及ぶ。そのうち、5農場は個人経営であるが、残りの7農場では企業経営が行われ、経営規模も大きくて出荷の9割以上を占める。最大手の鶏卵事業を行う養鶏事業所は、東京に本社がある。市内の養鶏業はパートなどで250名の雇用を生み出している。土地には、宅地並み課税がかけられている。

1979年には住民の要請で公害防止協定が成立したが、悪臭問題は今後とも課題である。ここ10年、養鶏場の雨水を再利用する施設化、アンモニアと硫酸を反応させての臭気対策、さらにこの生成物を肥料としての再利用などの研究が進められている。

(2007～11年度)』2007年。

18) 岐阜県『岐阜県森林づくり基本計画の概要

19) 岐阜県『岐阜県森林・林業統計書』2010年。

4.2 釜戸町にみる歴史文化・自然一体のまちづくり

まちづくり協議会と部会活動

2011年2月16日、釜戸町の公民館を訪ね、まちづくり協議会のリーダー3人、水野利之さん（まちづくり協議会会長、64歳）、中根良享さん（公民館長、70歳）、伊藤隆博さん（コミュニティセンター所長、59歳）から、まちづくりについてお伺いした。公民館は、市から指定管理を託され、民間で管理運営している。まちづくり協議会の所管は総務課で、事務局はここ（公民館）にあり資料的なものも保管している。まちづくり協議会には、文化教育部会、広報部会、健康部会、自然環境部会などがあり、各部会には市の職員が「支援職員」として付いている。

冊子『釜戸再発見』は2003年に発行し、全戸に配布した。2007年には竜吟の滝周辺の話、2009年には民話を冊子に織り込み、釜戸駅に置いている²⁰⁾。まちづくり協議会の広報部会では新聞などを発行しているが、民話を3つピックアップして小冊子『かまど3つのお話』をつくった。「白狐と河童と竜の里」という話²¹⁾で、文化教育部会にて各地区の委員が地区役員に聞き取りしてまとめたものである。

健康部会では、公民館にて「歴史を学ぶ会」の会員による講義をもとに、ウォーキングを兼ねて地元の歴史的スポットを訪ねるという「自然・歴史探訪ウォーキング」を企画した。2011年2月には、「権現山（旧・荻之島城＝現・刈安権現神社）と大久後砦跡を訪ねて」が催された。



図5 釜戸町まちづくり協議会のリーダーに聞く

注：2011年2月16日、釜戸町公民館にて撮影。前列の左から、まちづくり推進協議会会長・水野利之氏、公民館長・中根良享氏、コミュニティセンター所長・伊藤隆博氏。

公民館に集うまちづくりの企画と交流

「かまど通信」（釜戸公民館）が毎月発行され、各種催しなどがタイムリーに伝えられている。1月号では、「第18回元旦ウォーキング&ジョギング大会」（体育振興連絡協議会共催）に265名（ウォーキング133名、ジョギング132名）が参加した様子がつづられている。汗をかいた後には、けんちん汁とぜんざいが振る舞われ、タオルも配られるなど心づくしのボランティアに支えられ、参加者は年々増える傾向にある²²⁾。

釜戸公民館では、「地域教室」として「ふるさとの味」シリーズ（最終回3月15日）や「自然と親しむきのご菌打ち教室」（3月26日）、また中高生を対象に「ひなまつりケーキ教室」（3月29日）の開催、さらに映画会「おとうと」上映（3月19日）など、多彩な催しが企画され開かれている²³⁾。

財産区としての公有林の管理

1954年、釜戸村が瑞浪市に合併したとき、

20) 釜戸町まちづくり推進協議会『釜戸再発見』2003年。

21) 釜戸町まちづくり推進協議会『かまど3つのお話』

22) 釜戸公民館「かまど通信」2011年1月号。

23) 「かまど通信」2011年2月号。

釜戸にも財産区²⁴⁾が誕生し、山の管理が必要となった。財産区は463ha（内、山林は396ha）の資産を有し、80-90年の木もあって、間伐など森林の手入れを行い、搬出可能な丸太を市場に出している。一方、山林の一部120haを、ゴルフ場に貸している。

間伐など手が入らない森林は、日光が差し込まなくなって暗くなり荒廃していく。とくに、私有林の荒廃が深刻であるが、民間では手が出せない。近年、私有林も間伐の補助申請を農林課に出せば、国等の補助に市の補助が上乗せされ、やってもらえるようになった。

屏風山では、ハナノキ観賞会を行っている。せっかくの自然が、山と森林が忘れられている。山をもっと知ってほしい。それが、山の保護にもつながるといふ。

自然資源の利用と保全

まちづくり協議会の自然環境部会では、「自然と共生するまち」をめざし、「花をいっぱい育て、心和む、ゆとりのまちづくり」「河川、道路の美化を進め、清潔な美しいまちづくり」「里山の自然を守り、みどり豊かなまちづくり」を掲げて進めている。

まちづくりをどのように進めていくか。1つの目標として、自然・文化資源の保全整備と活用を図ることである。散策道の整備は、草刈りに30人ほどが参加するなど、ボランティアによって進められている。県の方では竜吟峡の上手の方に里山整備を計画しており、「県も変わってきている」といふ。

自然資源の利用と保全をめぐる、難題もあ

24) 釜戸コミュニティセンター『釜戸財産区資料(2010年度)』2010年。瑞浪市の財産区は約1千haあり、釜戸町の他に、日吉町(329ha、ほとんど山林)、大くて町(214ha、うち山林134ha)の3つの町にまたがる。

る。竜吟の滝については、水源である竜吟湖上流域の水質浄化対策が取り組まれてはいるものの、滝の水質汚濁を解消することが難しく、滝のイメージアップを損ねる原因となっている。

竜吟の滝は、不動川に7つの滝として点在している。不動川の水は、土岐川と合流し、下流域の庄内川から名古屋港に注ぐ。水質の管理は、川の上流から中流、下流にまたがる地域住民の協働によって可能となるものである。

さびしい釜戸をどうするか

釜戸では、まちづくりの一翼を担っていた商工クラブが、会員の減少と高齢化もあって2007年に解散を余儀なくされた。

4km先に、中山道の1宿場町である大湫宿^{おおくて}がある。秋(2010年11月23日)に開催のJRさわやかウォーキングは、竜吟峡の滝から中山道を通り大湫宿に至るコースで、1,500人程が参加するなど恒例となっている。

JR中央線の乗降客(2010年度)は1日あたり、瑞浪駅4,721人に対し、釜戸駅は394人とどまる。JR側から釜戸駅の無人化が発表される中、地元としては「釜戸がさびしくなっていくかん」ということで、乗車券の販売業務を市から年330万円で委託を受け、駅を運営している。せっかくなので、「駅舎を利用しよう」ということになり、中根さんがJR東海の事業本部まで出かけて折衝するも許可は出なかった。

アラシックスの危惧と願い

地域としての危機感がなく、なかなかまとまらないという。釜戸町は都会とはいえないが、瑞浪市街に10分、名古屋に1時間という位置にあって、田舎でもない。各部会は、アラシックス(団塊の世代)が支えている。「あと10年経ったらどうなるのか、自分たちは何がやれるか、また何をやってもらうか」。「養護老人設備があるが、自分たちは行くところもない。隣組

とか結^{ゆい}、これしかないのでは」という。

4.3 陶町の多彩な絆と創意的まちづくり

― 地場産業の衰退・高齢化・過疎に地域ぐるみで挑む ―

陶コミュニティセンターにお伺いし、伊藤晴昭さん(コミュニティセンター所長・公民館長, 58歳), 長谷川孝夫さん(まちづくり推進協議会副会長, 61歳), 小木曾光佐子さん(同企画広報部会長)に、陶のまちづくりについてお聞きした。



図6 陶町まちづくり推進協議会のリーダーに聞く(1)

注: 2011年2月16日, 陶コミュニティセンターにて撮影。左からまちづくり推進協議会副会長・長谷川孝夫氏, 同企画広報部長・小木曾光佐子氏。

陶町と古窯の歴史

瑞浪市の南端に位置する陶町^{すえ}は、標高400m以上の山間地にあり、猿爪^{ましずめ}²⁵⁾、水上、大川の3地区から成る。良質で豊富な陶磁器の原材料に

25) 猿爪は「ましずめ」と呼ばれるが、その由来が面白い。「見ざる・聞かざる・言わざる」の3猿は、ちょうどその姿が爪の字にみえる。「さる」は「去る」と語音が同じで縁起が悪いとされ、「さる」は「ましら」ともいわれることから、それが転じて「ましずめ」が生まれたという(『まちかどパンフレット』陶まちづくり推進協議会)。

恵まれていたために、製陶業が早くから営まれてきた。

中馬街道沿いであって、東に向かうと信州に通じ、西に進めば瀬戸を経由して尾張名古屋につながる交通の要衝に生まれた集落である。ここから瀬戸に至る街道沿いには、数多くの窯場があった。また、土岐川以北一帯にも陶業地域が広がり、黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部などの茶陶器も焼かれ、美濃は焼き物の一大産地として遍く知られるところであった。

陶町の大川窯は、加藤左衛門尉景信が1475年に開業したと伝えられている。戦国末期の4代・景度の時に、与左焼として全盛を誇り、大川東窯・西窯を中心に下窯・川平窯に上げられた。4代・与左衛門景度はひとり羽柴姓を名乗り、天正2年(1574年)には信長の朱印状も得ている。彼の作品(在銘)は、大川八王神社のこま犬と稲津町の興徳寺の茶壺に残っている。



図7 陶町まちづくり推進協議会のリーダーに聞く(2)

注: 2011年2月16日, 陶コミュニティセンターにて撮影。

左はコミュニティセンター所長・伊藤晴昭氏。
右は瑞浪市企画政策課・加納宏樹氏。

1563年には信長の制札を得て、加藤萬右衛門尉基範(尾州国瀬戸窯11代加藤市左衛門景茂の弟)が水上郷之木に移住し、水上向窯を創

業している²⁶⁾。

猿爪地区の桜ヶ丘公園内にある「陶祖碑」は、(大川窯開祖)加藤左衛門尉景信、(4代)加藤左衛門尉景度、(水上向窯開祖)加藤萬右衛門尉基範、(猿爪窯開祖)加藤仁右衛門尉景貞、(水上田尻窯開祖)加藤太郎右衛門尉景里の古窯開祖4氏と、近代窯業の開祖2氏、曾根庄衛門、中村弥九郎、の功績を称えて建立されたものである。

陶磁器工場と跡地利用

陶^{すえ}は、文字通り陶磁器の町であった。陶には、御三家と呼ばれる3社(曾根、山五、金中)があった。金中、山五には各々300人が働いていた。金中、山五は、有田の香蘭社にも素地を出荷していた。

山五の工場跡地には、山五の技術者がスポンサーになり「ユーポーセレン」をつくり、トンネルキルンを設置した。ローラーキルンでは、焼成雰囲気を整え品質を安定させるのが難しいからである。大和の工場跡地には、山喜が工場をつくり、50人ほどが働いている。

陶町の人口は、ピーク時には6千数百人が住んでいたが、今では6割の4千人前後になっている。

まちづくり25年の歩み

国道363号、ゴルフ場の建設、さらに小里川ダムの完成が間近の1985年、陶町まちづくり推進協議会は「アプリケーションSUE」を発表し、近隣町との観光産業面における密接な連携を保ちつつ、陶磁器産業を基盤にユニークなエリアをつくりあげる構想を打ち出した。翌86年、「陶町明日に向かって街づくり推進協議会」が発足する。

26) みずなみかたりへの会『陶町の歴史散策マップ』瑞浪市教育委員会。

小里川ダムは、洪水を調整し、東濃および尾張地域の水害を軽減させる目的で建設され、ダム直下につくられた発電所は最大1,800kwの発電を行う²⁷⁾。87年に「発電所記念館」の建設について、88年には「メロディー橋」について他地域の視察をふまえて、関係機関への陳情を行っている。小里川ダムの環境整備を中心にまちづくりが進められ、花いっぱい運動も初期から進められた。小里川ダムをめぐっては、その後も、2002年の湖底フェスティバル開催協力、03年の竣工記念完成式、05年のふれあいフェスティバル参加、07年の周辺もみじ植栽など活動が続けられている。



図8 世界一の美濃焼こま犬
注：2011年2月16日、撮影。

89年に「世界一の美濃焼こま犬をつくる会」を発足させ、90年5月に製作開始、同12月には「世界一の美濃焼こま犬²⁸⁾完成祝賀会」を

27) 『まちかどパンフレット』陶町明日に向かって街づくり協議会。

28) 1990年に製作された美濃焼こま犬は、高さ3.3m、重さ15tで世界一の認定を受けている。地元の大川窯4代目・羽柴与左衛門景度の作品をモデルにつくられた。瑞浪市制35周年に、国道419号線の起点と終点に位置する両都市(陶町・大川と高浜市)の姉妹都市提携を記念して、地元の人々の力を結集させ、生み出されたものである(『与左衛門窯』陶町明日に向かって街づくり協議会)。

開催し、12月には陶町ホームページを立ち上げています。98年に「茶壺製作実行委員会」が開催され、99年に世界一の茶壺「豊饒の壺」²⁹⁾完成、2000年には「茶壺銘板製作過程陶壁」も完成する。01年、こま犬と茶壺がライトアップされた。05年、与左衛門登り窯および作陶室の起工式が行われ、町民が一丸となって取り組み、06年には県内最大級の6連房の登り窯として再現した。隣接の「陶房与左衛門窯」では、作陶体験ができる。

2004年9月、陶コミュニティセンターが完成し、同10月に完成記念「AUN(あ・うん)」コンサートを開催した。2007年、防災講演会と3地区の防災マップづくりが行われ、08年の防災アンケートをふまえ、08年に大川地区、09年に水上地区、10年に猿爪地区の防災訓練が行われた。少子高齢化に伴い、安心・安全に暮らせるまちづくりをめざし、自主防災に主力をおいた活動が近年の特徴となっている³⁰⁾。

元気な高齢者のまちづくり

陶町は、高齢化率(65歳以上)が33-34%と高く、瑞浪市内でNo. 1である。現役として活躍されている80代など、元気な高齢者も多い。ここでは「高齢者は65歳以上」というと、ブーイングが起こる。70代でも若いとみられる。

元気なお年寄りの1人が、公民館に来られていた松本芳郎さん(86歳)である。マレット・

ゴルフの愛好家で、4月の祭りには「五平もち」2千本を、自分で材料を買ってきて焼くという。豆まきには、いつも幼稚園にいて一緒に遊ぶ。年に5-6回、幼稚園を訪問するが、4月3日には園児24人と腹踊りをした。道で出会うと、手を振ってくれる。ドンド祭りは、陶子供会連合会と一緒にやっている。

中学生とは、年に3回、給食を一緒に食べる。オープンスクールで「先輩の話を聞こう」という企画があり、グラウンド・ゴルフの指導などを行っている。陶中学校は、校長と教頭が最強のコンビを組んでいる。

3つの町(稲津町、陶町、山岡町)が、「いやす里の会」をつくっている。陶町と山岡町は恵那郡であったが、このうち山岡町は恵那市に、陶町は瑞浪市に編入された。「陶町は瑞浪市の盲腸のようなもの」と卑下するも、過疎化および少子高齢化に取り組む先進モデルとなっている。

救援ネットワークとまちづくり

中学生を絡めた援護者ネットワークをつくり、2011年度より防災訓練などを行う。独居老人などには、必要な情報やサービスを中学生に届けさせる。

少子高齢化が進むなか、陶町は、「安心安全に暮らせるまちづくり」をめざし、大川、水上、猿爪の3地区に分かれて防災訓練を行っていた。しかし、縦に細長く、思うように動けなかった。いやす里にコーディネーターとして来られていたNPO法人「レスキューストックヤード」の栗田氏との出会いを契機に、陶は「自分の身は自分で守る」という自主防災を軸にした訓練に踏み出すことになる。

レスキューの指導のもと、防災マップづくり、プロジェクトメンバーの育成に力を入れ、大川地区、水上地区で訓練を行う。さらに猿爪

29) 高さ5.4m、直径4m、使用粘土32tで、一体成型のやきものとしては世界一(ギネス認定)である。製作に1年を費やし、延べ12,000人の地元の労力によってつくり上げられ、1万束の薪を燃料にして300時間かけて焼成された(みずなみかたりべの会『陶町の歴史散策マップ』瑞浪市教育委員会)。

30) 「街づくり25年の歩み」陶町明日に向かって街づくり協議会、内部資料。

地区では、県の防災ヘリ、自衛隊、消防署の協力を得て、集大成ともいえる訓練を行った。

この間、陶町を担う中学生の役割がはっきりしてきた。古田勉校長の赴任を機に、中学生を絡めた要援護者ネットワークをつくり、2011年より本格的な訓練などを行う。独居老人などには、必要な情報やサービスを中学生に届けさせることで、見守りにもつながり、新しい防災の形が出来上がってくる。

同級生単位でのまちづくり活動

水上、大川は独居が多く、猿爪は若い人が出て行って老人だけの世帯が増えているなか、まちづくりをいかに進めていか知恵を絞っている。

猿爪には約750世帯があり、誰かが区長になると、同級生単位で手伝うという習慣ができています。例えば、花を種から育てて陶の町中に配るという活動などを、同級生がお手伝いするのである。

世界一の美濃焼こま犬陶器も、町民総出で焼いたが、同級生ネットワークが大きな力となった。同級生単位で作業を割り振り、素人は素人なりにやれるところを分担し、年寄りや昼間、若いものは夜間を担当して、何日もかけて焼き上げた。若い人が流出するなか、これまで濃厚であった同級生単位の結束も薄れ出しているという。

山の手入れ・遊歩道の整備活動

2004年度には、福祉を大事にするまち、「福祉村」づくりを掲げる。こま犬の里に「ウサギ岩」があるが、雑木が伸びて姿が見えなくなっていた。「12年に1度は姿を現す」との言い伝えもあることから、雑木を刈って、山道ウォーキングができるようにした。これは、中日および読売新聞に掲載された。

まちづくり推進協議会はシンクタンクと相談

し、山歩きの好きな人たちに里山教室を提案した。里山教室に参加したボランティアグループの方でも、山の手入れをして、ダム左岸の遊歩道を整備しようということになり、リーダーの山田さんは国交省にも出かけて調整にあたった。「全国海づくり大会」が岐阜県の関市で開催された際には、小里川ダムがサテライト会場になった。

歴史的な文化遺産でもある桜堂の周辺整備が求められているが、キリンビールの社員が下刈りの手入れをして植樹を行っている。

情報交流を育む『陶コミュニティ通信』

『陶コミュニティ通信』は、毎月1日に発行されており、2011年2月号（2月1日発行）で383号に達している。A3サイズ1枚ながら紙面の表裏には各種催し（予定や結果）などがびっしり紹介されている³¹⁾。2011年2月号には、節分や恵方巻きの由来や民話なども紹介されている。

2010年12月号は、シニア層と子どもたちの交流特集といった様相を呈している。10月29日の寿大学大運動会には寿大学生46名が参加し、11種目の競技で競い合うなか、途中で幼児園のちびっこ応援団も駆けつけて一緒に楽しんだ。11月6日の陶中学校のオープンキャンパスでは7人のOBを講師に招いて体験活動を行い、11月11日には長寿会の34名と中学1年生がグラウンド・ゴルフ交流を行っている。11月16日の「ひなたぼっこの集い」には70歳以上の1人暮らしの方など100名が参加し、幼児園児の歌やリズム、肩たたきプレゼントなどを楽しむ。

31) 陶町明日に向かって街づくり協議会『陶コミュニティ通信』2010年4月～2011年2月号。

同10月号および11月号では、10月16-17日の第35回陶町文化祭・第19回サニーヒルズ祭がトップ紙面を飾る。10月23日の第40回みずなみアマチュア映画祭では、会員の13作品が上映されたが、最終回を迎えるなか、270名と立ち見が出るほどの盛況だった。

『陶コミュニティー通信』には、表紙の右上段に陶町の人口動態表（前月1日現在）が載っている。微減傾向が続くなか、各号の増減は一ケタ台が多いが、11月号の△32名に驚く。半年ほどさかのぼって2010年4月号をみると、2010年度の陶公民館学級・講座等開催計画が大きく紹介されている。（10月号でも拝見した）「陶寿大学」は、高齢者向けに総合学習の場として企画された講座である。その他、一般成人向けをはじめ子ども向け、スポーツ・文化や家庭教育を対象にした講座が多彩に組まれている。

5 おわりに

みずなみ焼の経営とまちづくりに共通して感じられるのは、現実と対峙し危機感をバネに変革のエネルギーへ変えていくリーダーが少なくないということである。「思い」を現実の力、活動に変えていくカギは、創造性にあるとみられる。

衰退の著しい瑞浪市内の陶磁器産業にあって、美濃焼の伝統をふまえつつ「洋」と「和」の新たな融合をめざし、「みずなみ焼」という地域ブランドを掲げ、海外出展にチャレンジしつつ地域としての産業振興を図るといふ、変革に向けた活動を生み出している。それを担う経営者は、自社の経営にあってもコンセプトを明確にしての創造的な経営を展開されている。(株)深山は、時代の感性をふまえたデザインなどを

企画・提案し、ユーザーに売り込む道に徹し、高品質・高歩留りの「美しい」ものを次々と生み出している。山喜製陶(株)も多様な販路を開拓しつつ量産経営を生かすという「全方位戦略」を創意的に展開されている。

一方、森林が7割を占め山間地に位置する瑞浪市では、耕作放棄地や未手入れの山林が増え地域荒廃の懸念が高まる中、行政が積極的な従事者と協力しつつ、耕作放棄地での飼料栽培や放牧経営、山林の手入れを進めつつある。釜戸町の趣向を凝らしたまちづくりには、アラシックスのリーダーたちにみる地域への危機感がバネになっているとみられる。

地場産業の衰退とともに高齢化・過疎のより顕著な陶町では、まちづくりはより濃密かつ積極的に展開されている。幼児園児から中学生に至る子どもたちとシニア層の交流は、実に多様で創意に富んでいる。中学生を絡めた援護者ネットワークをつくっての防災訓練では、防災活動そのものを多様な年齢層や近隣住民をより密接に結びつける活動として生かしている。1990年の「世界一の美濃焼こま犬」づくり、99年の世界一の茶壺「豊饒の壺」づくりには、地域住民による総出の取り組みにより実現したものである。その背景には、誰かが区長になると同級生単位で支援していくといった濃密な同級生ネットワークも大きな力を発揮したとのことである。高齢化や過疎の大波は、それらの絆を弱め解体しようという外的な力として押し寄せているが、それらとの熱く創意に満ちた闘いは、地場産業の危機と格闘する企業の創造的経営と軌を一にするものといえよう。

産業経営とまちづくりの創意と熱い思いが、行政を媒介に共鳴し融合して、地域ぐるみの創造へと発展していくことを、そして小論がその

触媒になればと願っている³²⁾。

参考文献一覧

朝日新聞, 2010.12.2。
稲津コミュニティセンター「緑豊かな屏風山と温もりのまち稲津町」。
釜戸町まちづくり推進協議会『釜戸再発見』2003年。
釜戸町まちづくり推進協議会『かまど3つのお話』
釜戸公民館「かまど通信」2011年1, 2月号。
釜戸コミュニティセンター『釜戸財産区資料(2010年度)』2010年。
岐阜県『岐阜県森林づくり基本計画の概要(2007～11年度)』2007年。
岐阜県『岐阜県森林・林業統計書』2010年。
岐阜新聞, 2010.10.14付。
陶町明日に向かって街づくり推進協議会『まちかどパンフレット』。
陶町明日に向かって街づくり協議会『陶コミュニティ通信』2010年4月～2011年2月号。
中部経済新聞, 2010.10.7付。

十名直喜「地方行政改革とまちづくり—第4次瑞浪市行政改革大綱(案)づくりを通して—」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第48巻第2号, 2011年10月。
瑞浪市『瑞浪市の農業(2010年度版)』2010年。
「みずなみ焼」
www.jp.o.go.jp/torikumi/t_torikumi/tourokushoukai/bunrui/pdf/21-015-5097114.pdf。
<http://www.mizunami.biz/j/event/index.html>。
みずなみかたりへの会『陶町の歴史散策マップ』瑞浪市教育委員会。
瑞浪陶磁器工業協同組合『みずなみ焼』。
『Miyama 2010 Gift collection—うつくしいうつわ—』miyama planning co., Ltd, 2010年。
『Miyama original tableware—うつくしいうつわ Japanese Modern—』miyama planning co., Ltd, 2010年。
「山喜製陶のこだわり」(<http://www.yamakiseito.co.jp/mind/>)。

32) 小論をまとめるにあたっては、「日本学術振興アジア研究教育拠点事業」(「人間発達の経済学」日中研究交流プロジェクト)での議論を参考にした。